

私の 高校総体 ①

地元の声援味方に大会新

山梨など4都県で開かれる2014年の全国高校総体育大会（読売新聞社共催）の開幕まで3か月を切った。県内で高校総体が開催されるのは18年ぶり。多くの新記録と感動が生まれた1996年の前回の山梨大会で活躍した選手らに当時を振り返ってもらい、今大会への期待を聞いた。

日本水泳連盟理事 萩原智子さん 34



温かい気持ちになったことを覚えている。
1996年8月19日、山梨学院大付1年で出場した小瀬スポーツ公園水泳場（甲府市）での女子2000メートル背泳ぎ決勝。両側には、大会直前に行われたアトランタ五輪・日本代表の中心選手（大阪・近大付3年）と中村真衣選手（新潟・帝京長岡2年）。同年4月の日本選手権で2人に敗れ、五輪出場を逃していたが、「悔しさをはらす」という気持ちはありませんでした。それよりも、知り合いの応援の中で挑戦できる喜びの方が大きかったですね。
リラックスして臨んだ決勝では持ち味のダイナミックな泳ぎを発揮、ライバル2人を2秒以上引き離し、2分12秒34の大会新記録で初優勝を飾った。



高校総体・女子2000メートル背泳ぎで初優勝した萩原選手（1996年8月19日）

▲高校総体の新記録を手に「世界を後継者に送る」と萩原さん（東京都内）
出場した高校総体の新記録を手に「世界を後継者に送る」と萩原さん（東京都内）

周囲の温かさに気づかされ

で出場したカナダ選手権の2000メートル背泳ぎで、日本歴代2位の2分11秒82（中学新）を記録。1分75の長身を生かしたダイナミックな泳ぎが特徴で、周りからアトランタ五輪を目指せると騒がれた。だが、「そんなに五輪って大事なの」と反発し、練習に集中できなかった。
ところが、地元開催となった高校総体がそんな心をときほぐしてくれた。「頑張っただけ」と心から励ましてくれる友人、「応援してくれるよ」と声をかけてくれる大会運営スタッフ。表彰台に立った時は、思わず満面の笑みで観客席に手を振った。
「今だから話せますが、実は試合前に会場で『智子、早く帰って来なさい』と声をかけてくれた審判もいました。後で怒られたそうですが、でも、それくらい、たくさんの人の応援が力になり、表彰台に上った経験が自信になりました。まさに人生のターニングポイント。周囲の温かさに気づかされ、恩返ししたいとも思い、初めて本気でシドニーを目指そうと思えました」

2014年の高校総体に出場する選手たちには、「大会の先に世界を見据えてほしい」と考えている。今の高校生が競泳選手として実力がつく頃、東京五輪（2020年）が開催されるからだ。
「東京五輪を目標にできるのは本当に幸せなこと。私は高校総体で戦った中尾選手を目標に上を目指した。周囲の応援を味方につけながら、高校総体ではライバルを見つけ、互いに高め合いながら世界に挑戦してほしい。後輩たちにエールを送る。」

私の 高校総体 ②

読みの帆走で頂点に

「自分のヨット人生でベストのレースだった」――。県立吉田高3年時に出場した1996年の高校総体・男子FJ級ソロで優勝。なかでも初めて1着となり、勢いをつけた第2レースをこう振り返る。

FJ級ソロは、2人乗りのヨットで全7レースを競い、成績の良い6レースの合計得点を争うもの。4日間行わ

ホンダ **高村幹治** さん 35
(ヨット)

れた大会で、第2レースは初日の8月20日。快晴だが風が弱く、かじ取りの難しい日だった。競技会場は山中湖村出身の高村さんにとって「究極のホーム」という、いつもの練習会場である山中湖。周囲を山に囲まれ、風向きの変わりやすい会場だが、誰よりも練習したから必ず風が読めると思っていた。レースでペアを組

む同級生の羽田文明選手と週6日、長い日は1日7時間の猛練習を積んできたという自信が緊張感を吹き飛ばした。レースは終盤、無風状態になり、湖面は鏡のように夏の日差しをはね返していた。予想通り、国体などで何度も争ってきたライバル、三部泰誠選手（佐賀・唐津西3年）らのヨットと競り合い、ゴール直前、局地的な風で湖面

が黒く波打つ「ブロー」を見つけ、かじを切った。一気に風をつかんでフィニッシュラインを滑り抜け、最後の高校総体で有終の美を飾った。「最後まで気を抜けないレースだったが、1着になって頬に受ける風がとにかく爽快でしたね」

進学した法政大学でもヨットを続け、2000年の4年生時には全日本学生選手権の470級で団体優勝を果たした。その後、進路に悩んでいた時、かつてのライバルで、高校を卒業後にホンダに所属していた三部さんから声がかかった。「一緒にアテネ五輪を目指さないか」

心が動き、01年にホンダに入社。三部さんとペアを組み、全日本実業団選手権や高知国体などで優勝。その勢いで、目標だった04年のアテネ五輪出場を狙うも、惜しくも日本代表には選ばれなかった。それでも、サポート要員として現地入りし、選手を支えた。

* 昨年の東京国体ではシングルハンター級で5位入賞を果たし、今も現役を続けている。

今夏、山中湖は高校総体の会場ではないが、出場権をかけた関東大会が7日から同湖で始まる。

「高校総体は『もっと上り詰めた』と貪欲さを刺激された最高の晴れ舞台だった。強豪と戦うことは大きな刺激になる。地の利を生かしてまずは予選突破を」と、県勢の活躍に期待を寄せている。



●高校総体の写真を見ながら「最高の晴れ舞台だった」と回想する高村さん（東京都内で）●高校総体の第2レース直後、立ち上がった笑顔を見せる高村選手（右）と羽田選手（1996年8月20日）

私の 高校総体

③

県立白根高の男子ホッケー部主将として、1996年8月6日、同高第一運動場（南アルプス市）で高校総体の決勝に臨み、岩手県立沼宮内高に1-3で敗れ、準優勝。「絶対優勝すると信じていたから、めちゃくちゃ悔しくて」。苦い思い出として記憶に残っている。

近くの釜無川から熱風が吹き込み、会場はうだるような暑さだった。後半に入り、点差は2点。前日の準決勝で逆転打を放ち、勝利をつかんだようなチャンスが来るはずだと信じていた。果敢に攻め込んだが、相手の堅守に阻まれ続けた。プツッ。試合終了のブザーが人工芝のグラウンドに鳴り響いた瞬間、汗だくのまま天を仰いだ。

「試合後、報道陣の取材には気丈に『準優勝だけど胸を張りたい』と答えましたが、

重圧に縛られV逃す

本当は全く違った。今思えば、当時は重圧に縛られてしまっていたのかも」とつぶやいた。

＊

「天下の白根高だから勝つて当然」。同高は当時、ホッケーの強豪校として全国に知られ渡り、県民の間でも優勝を期待する声が多かった。土橋さんが同高に入学した94年、

同高ホッケー部は高校総体3連覇を達成し、翌年、県イメーリアップ大賞の特別賞を受賞。86年のかいじ国体で地元・旧白根町（現南アルプス市）がホッケー開催地になったのをきっかけに、各地区にホッケーの小学生チームが誕生し、育った有力選手が次々と同高に入学。小学5年でホッケーを始めた土橋さんも、そ

んな一人だった。同高は95年の高校総体では準決勝で敗退し、4連覇を逃していた。それだけに96年の地元開催への期待は大きかった。大会の総合開会式の旗手に抜き置かれた土橋さんは「優勝を逃さ取ってきます」と宣言。しかし、大会が始まると、「大きな期待は選手たちのプレ

ッシャーになり、勝ち進むたびに緊張でプレーが固くなっていくと感じていた」という。

高校総体で「敗北」を味わった同高は雪辱に燃えた。「この悔しさを晴らすぞ」と合言葉に猛練習。10月の広島国体では優勝を果たした。

「高校総体で負けたからこそ、今の自分があると思う。負けて深まった仲間との絆は一生の宝物ですね」

＊

高校を卒業すると、法政大学陸上ホッケー部に入ったが、1年生の時、練習試合で腰を負傷し、大学時代で第一線からは退いた。今は南アルプス市で整体院を営む傍ら、年に数回、指導を依頼され、地元の小学生に教えている。

「プレッシャーを気にせず、強豪とぶつかってほしい」。思い出深い白根高第一運動場は今夏の大会でも会場の一つになっており、高校生たちの熱い戦いを楽しみにしている。

「どばし整体療術院」院長 土橋明さん 35

（ホッケー）



①今大会でも使われる県立白根高第一運動場で「選手たちの雄姿を目に焼き付けたい」と話す土橋さん②決勝でシュートを放つ土橋選手（前左） 1996年8月6日



私の 高校総体

④

県立日川高の選手が2回目のジャークで125キを持ち上げ、大会タイ記録を達成。1996年8月2日、旧牧丘町（現山梨市）の町立牧丘第一小体育館で観戦していた中学2年生は、それまでの緊張感漂う静寂が一変し、歓声で包まれた会場の雰囲気

に心を奪われた。「選手が輝いて見えました。自分もやってみたいと思いました」。小学生の頃は柔道、中学で野球部に所属していた山浦少年はこの日、小学時の柔道のコーチに誘われ、初めて重量挙げの試合を観戦。1年半後の98年4月、日川高に入学し、ウエイトリフティング部の門をたたいた。

＊ 入部後は「大勢の観客の前

日川高教諭 山浦 伸吾 さん 31

（重量挙げ）

人生変えた歓声、感動

でバーベルを持ち上げるのが「個人優勝に輝いた。快感」で、150キのバーベルを背負って何度もスクワットをするなど、週6日、1日3時間の練習を続けた。3年生の2000年8月、岐阜県で開催された高校総体で団体優勝を果たし、関東大会でも

個人優勝に輝いた。「高校で重量挙げを教えた」と、教員免許を取得するために、01年に信州大に進学。ウエイトリフティング部はなかったが、1年生の時は個人で練習を続け、02年の2年生時に同級生4人を集め、部を

創設。同年、全日本学生新人選手権で3位に入り、この年から3年連続で長野県代表として団体にも出場した。

＊ 選手たちに最大限配慮し、宿泊先は会場からなるべく近い場所にするよう手配した。大会直前は減量に臨む選手が多く、移動時間が長いと苦しいことを自身の体験から知っていたからだ。

「受け入れ側も精いっぱい準備をしている。日本記録、大会記録が生まれる舞台になれば本望」と山浦さん。「18年前、地元で行われた高校総体で自分の人生は変わった。大勢の子供たちに来てもらい、重量挙げの魅力を知ることができてもらえば」。

＊ 今大会にかける思いは、選手たちに負けないつもりだ。



「重量挙げの魅力が伝わる最高の舞台を準備したい」と今大会の準備に意気込みを見せる山浦さん（山梨市役所で）



日川高に入学し、高校総体に出場した山浦選手（2000年8月）

私の 高校総体

⑤

入念な準備で栄冠

山の中を時に不眠不休で駆け抜け、タイムを競うトレイルラン。2012年5月の「ウルトラトレイル・マウントフジ」（山梨県、静岡県）で3位入賞、同年8月の「ピレネー大耐久レース」（フランス）では日本人初の優勝と、世界で活躍するトレイルランナーは、中学2年生の時、父親からのこんな一言で誕生したと言っても過言ではない。

「お前が高校2年になったら、山梨で高校総体があるぞ」

当時、通っていた韮崎市立韮崎西中学では、陸上部に所属し、1500メートルを打ち込んだ。しかし、県大会ではいつも4位で、表彰台が遠かった。登山競技に詳しい親戚からも、山を知っているかが勝負の行方を大きく左右すると教えられ、気持ちが傾いた。「何でもいいから日本一になって目立ちたい。表彰台の真ん中に上りたい」。山登りの

韮崎工高教諭

山本 健一さん 34（登山）

経験はなかったが、県内の強豪校・韮崎高に進学して山岳部に入部。2年生の時の1996年の高校総体で同高は団体優勝に輝き、その一員になった。

山岳部の練習はハードだった。毎日2時間、顧問から地図の読み方や応急手当の方法などを学んだ。一方、リュックを背負ってのランニングや、北岳など山中での合宿で

実践を積んだ。高校総体の直前は、毎週のように甲斐駒ヶ岳や北岳に出掛け、大会と同じコースを何度も縦走。地形を隅々まで頭

にたたき込んだ。本番では、審査項目10項目のうち7項目で満点をとって優勝し、県高体連から特別表彰も受けた。「プレッシャーはあったが、

それを上回るぐらい準備を重ねたという自信もあった。高校時代の経験は大学卒業後に始めたトレイルランでも役立ち、入念な準備でプレッシャーをはね返す勝利の方程式も身につけた」といい、今も海外遠征の際は1週間前に現地入りし、危険な箇所を実際に走って確認するなど、万全な備えで大会に臨んでいる。

登山競技中、仲間と小休止する山本選手（右端）（1996年8月）



特別表彰の盾を持ち、「高校総体なしにトレイルランナー山本健一は生まれなかった」と話す山本さん（韮崎市で）



現在は、勤務する県立韮崎工業高で山岳・スキー部の顧問を務め、後進の育成にも力を注ぐ。7日から始まった県高校総体では、副審判長として三ツ峠（富士河口湖町、西桂町、都留市）で教えるたちの活躍を見守っている。「何でもいと思っただけの登山ですが、登ってみると林でカモンシカに出会ったり、山頂から雪渓を眺めたりと、自然の雄大さを体感できた。全国優勝を目指して努力するのも大事ですが、目指す過程で登山の楽しさを知ってもらえれば、それが一番うれしい」と話している。

（おわり。この連載は、久保拓が担当しました）